

# 中国語入門講座のコースデザイン： APU 孔子学院社会人向け短期集中講座を事例として

陳 瑞英

## アブストラクト

本稿は、立命館アジア太平洋大学孔子学院において行われた社会人向け中国語短期集中講座を事例として、中国語入門講座のコースデザインについて考察したものである。本講座における受講者の学習背景とニーズを紹介したうえ、中国語学習の動機づけ、複合シラバスの導入、ネイティブ教師によるチーム・ティーチング指導体制、コミュニケーション能力の育成を重視したカリキュラム・デザイン、シラバス・デザインならびに講座の実施過程を記述した。

また、学習評価をもとに、本講座のコースデザインの意義と課題を考察した。その結果、コース目標の提示、目標到達自己評価、課題の提示、生教材の使用などの取り組みは、中国語学習のモチベーションの向上に有効に作用していると考察された。また、音声学上の知識面と技能面が一体となった発音基礎訓練は、中国語の発音基礎作りに大いに役立っているといえる。さらに、複合シラバスの採用とコミュニケーション能力の育成を重視した活動により、中国語入門段階でも「わかる」教育と「できる」教育を同時に行うことができるという示唆を得た。

**キーワード：** 中国語入門、短期集中講座、コース・デザイン、複合シラバス

## 1. はじめに

昨今の目覚ましい中国の経済発展を背景に、国際社会における中国語の位置づけが一段と向上し、中国語を学ぶ人が増え続けている。このようなニーズを受け、立命館アジア太平洋大学孔子学院（以下、APU 孔子学院）は、中国政府の推進する「国際的な中国語教育制度の開発・整備、中国文化に対する世界各国の理解の促進」を目標とするプロジェクトのもとで、2007年から中国語教育を推進し、そのための各種の学習資源の提供や支援を行っている。その一環として、一般市民をはじめ、学生、社会人などに対して入門、初級、中級、上級、HSK（漢語水準試験）指導など各レベルの中国語講座を開設している。

一方、立命館アジア太平洋大学（APU）では、世界79か国・地域出身の留学生が学生の約半数を占めるという多文化・多言語環境にあることから、企業の人材育成に活用してもらうために、企業人材育成プログラムを実施している。2014年4月、APUは大分県にある企業から渡航前の中国語短期集中研修の依頼を受け、APU孔子学院が主体となって中国語短期集中講座を実施した。

本稿では、本講座における受講者の学習背景とニーズを紹介し、それに基づいたカリキュラム・デザイン、シラバス・デザインならびに講座の実施過程を記述する。また、受講者へのアンケート調査（巻末資料2参照）と目標到達自己評価（巻末資料1参照）などをもとに、本講座のコースデザインの意義と課題を考察し中国語教育への一提言としたい。

## 2. 受講者の背景とニーズ

受講者は民間企業から派遣された30代の会社員1名で、日本語母語話者である。英語の学習歴はあるが中国語ははじめてで、ゼロからのスタートとなる。中国語研修後、中国の教育機関へ二年間留学し本格的に中国語を勉強する予定である。その傍ら、海外ビジネス活動も展開する計画である。受講の目的は留学先での中国語学習をよりスムーズに進めるためとしており、到達目標としては、①中国語の基礎である発音を正しく習得すること、②簡単な日常挨拶や自己紹介ができる、の2点が挙げられている。受講者の都合に合わせて、講座の実施期間は2014年4月の18日間とし、マン・ツー・マンの個別学習形式となる。

### 3. コース・デザイン

受講者のニーズ、レディネス、学習スタイルなどの諸要因を考慮して、APU孔子学院では以下のような基本的な枠組みを定めた。

#### 3.1 講座の基本的な枠組み

##### 3.1.1 コース目標

- ①母音と子音を正確に発音でき、声調をマスターし、音節が正しく読める。
- ②学習した語彙はピンインなしで読み書きができる。
- ③学習した表現の構造、意味、機能を理解したうえ、その表現を用い、文法的に正確かつ場面的に適切なアウトプットができる。
- ④簡単な表現を使って自己紹介など初歩的なコミュニケーションができる。

##### 3.1.2 チーム・ティーチングによる指導体制

中国語学習における最も重要な基礎発音の学習に重点を置き、正しい発音ができるように、丁寧に指導する。また、コミュニケーション能力の育成にも力点を置く。そのため、複数のネイティブ教師によるチーム・ティーチング指導体制を作り、受講者により多くの語学教師と接する機会を提供し、言語の実際の使用場面に配慮した指導の充実を図る。(筆者を含めAPU孔子学院中国語教師4人とAPUの中国人留学生TA 4人<sup>1)</sup>による指導体制)。

##### 3.1.3 機能性を重視した教材の使用

『漢語会話301句(上)(日本語注釈版)』(北京言語大学出版社)を主教材とする。本教材には「あいさつ」、「知り合う」、「買い物」など、コミュニケーションに必要な30近くの場面が掲載されているので、基本的な文型を習得することが可能で、場面つきの会話を無理なく勉強できるなど、短期講座の教材として有効だと考えている。課の内容に応じて発音練習や応用練習の資料も用意する。

##### 3.1.4 時間割

講座期間は18日、学習総時間は53コマ(1コマ95分)、一日3コマとする。学習内容別の時間割は表1に示すが、基礎発音・語彙・文法・本文の学習時間には30コマを当てA教師(筆者)が担当する。学習した表現を使う応用練習には10コマを、コミュニケーション活動には5コマを当て、APU孔子学院ネイティブ教師3人が担当する。そのほか、TAを4人配置し応用的な会話練習をサポートする。海外ビジネスを展開する上で必要とされる中国語の歌も、学習内容の一つとして金曜日の最後の1コマに盛り込む。課ごとの練習と週一回の小テスト、コース目標の達成状況を確かめるための修了試験と成果発表会を実施する。試験問題の出題・採点・分析およびアンケート評価などについては、主にA教師が担当する。

表1 中国語短期研修講座における学習内容別の時間割

学習内容	コマ数(1コマ95分)	担当教師
基礎発音・語彙・文法・本文	30	A教師
応用練習	10	教師3名(B、C、D)とTA4名
中国の歌	3	D教師
コミュニケーション活動	5	教師3名(A、C、D)とTA4名
テスト・分析・補強	4	A教師
学習成果発表(終了式)	1	孔子学院関係者・指導教師全員
合計	53	

<sup>1)</sup>: TA (Teaching Assistant) 語学教員の指示のもと、留学生が授業の補助や運用支援を行っている学生のこと。

### 3.2 シラバスおよびカリキュラム・デザイン

短期間に「正しい発音の習得とコミュニケーション能力の向上」という目標を達成するためには、適切なシラバス・デザインおよびカリキュラム・デザインが求められる。その作成に当たり、とりわけ以下のことを念頭に検討を行った。

#### 3.2.1 シラバス・デザイン

外国語教育のシラバスは文法に焦点を当て体系的に学習できる「構造重視型」、言語の実際の働きに着目し言語の応用能力の育成を重視する「機能重視型」、およびある話題や出来事を中心に学習する「意味重視型」という三種類に大別される。さらに「機能重視型」には、場面シラバス、機能シラバス、タスクシラバスが含まれている（胡 2009）。本講座は、短期間学習といえども、単なる一過性の中国語習得ではなく、今後の継続学習の土台となりえる構造重視型のシラバスが必要であろうと考えている。その一方で、受講者が海外へ行ってすぐその地域のコミュニティの一員となることを考慮し、簡単な挨拶ができるように機能重視型のシラバスも不可欠であろう。そこで、単一のシラバスではなく、構造シラバスと場面シラバスを組み合わせた複合シラバスをベースとしたうえで、復習・まとめとしてタスクシラバスを取り入れることにした（表2）。

表2 複合シラバス

課	発音・文法項目	コミュニケーション機能
1	発音編/普通話とは/表音文字/声調/母音と子音 軽声/三声変調/ピンイン表記	簡単な挨拶/自分の名前
2	発音編/母音と子音/表音文字/ピンイン表記	初対面の挨拶/人に会ったときの挨拶/ 人と別れるときの挨拶/感謝の意を表す言い方
3	発音編/母音/表音文字/ピンイン表記/「不」「一」の変 調/アル化の音/音分離記号/数値/年月日/小テスト	初対面の挨拶/相手のことを尋ねる
4	「吗」を用いる疑問文/疑問代名詞を用いる疑問文/形容 詞述語文	自己紹介/相手の名前を尋ねる/職業を語る/国籍を語る
5	動詞述語文/所属・所有関係を表す連体修飾語/「是」文	友人の家を訪問する/友人を他人に紹介する/これからの 予定を尋ねる
6	名詞述語文/「年月日曜日」の表し方/・・・好吗	生年月日を語る/日付、曜日を語る/誘い方
7	「有」文/前置詞構造名詞述語文 小テスト	家族構成を語る/家族の職業を語る/日常生活の好き嫌い/ 趣味を尋ねる /インタビュータスク
8	時間の読み方/時間詞	時間を語る/何時に何をするかを語る/簡単な日課を語る
9	連動文/連用修飾語	家などの所在地を語る/どこに住んでいるかを語る
10	方位詞/反復疑問文	道順の尋ね方/ものの場所を尋ねる/物の場所を語る
11	数字の言い方/お金/能願動詞/復習	相手の電話番号/アドレスを尋ねる/レストランで飲み物・ 料理を注文する/お金の言い方/値段を尋ねる
	修了テスト	ロールプレイ

#### 3.2.2 授業法

中国語教育に影響を与えてきた外国語教授法の中には、「文法訳読法」「直接教授法」「オーディオリンガル法」「コミュニケーション・アプローチ」などがある。近年、中国国内の対留学生の中国語教育では、伝統的な「文法訳読法」から学習者の第一言語を介在させず直接、目標言語である中国語を媒介言語として行う「直接教授法」へ移行する動きが顕著にみられる。知的訓練の一つとして位置づけられている文法訳読法は、文法規則の説明、母語と目標言語との間の

翻訳練習が強調される反面、伝達能力の育成には向いていないとされている(早田ら1994)。これに対し、直接教授法は使われる場面や状況を提示することによって文や語の意味を直接目標言語の形式と結びつけて理解させるという特徴がある。また、近年、提唱されたコミュニカティブ・アプローチは、コミュニケーション能力の獲得を目的とし、言語規則より言語機能を優先することを特徴とし、これに基づいた学習者中心のコミュニカティブ活動が実践されている(高島2000; 胡2009)。

本講座では、受講者の学習目的の達成を重視しつつ、上記教授法のどれか一つだけを使用するのではなく、複数の教授法を適宜組み合わせることにした。

### 3.2.3 発音指導

発音の基礎力をしっかり固めるには、中国語の発音習得に必要な音声学上の知識の学習、また、中国語と日本語の発音上の相違点と共通点に関する音声学上の理解、および正しい発音ができる基礎的な技能訓練が必要不可欠である。しかし、いつの段階で、どのレベルまで音声学上の知識を伝授するかが極めて重要と考えられる。あまり早い時期に音声学上の知識と厳しい発音訓練を行うと受講生が複雑さや難しさに耐えかねて学習意欲を失ってしまうことにもなりかねないからである。中国語の発音段階初期で挫折してしまう学習者が少なくない現状を踏まえ、受講者の心理的な負担にならないように、受講者の語学適性などを見極めながら慎重に判断することにした。

### 3.2.4 動機づけ

動機づけは言語の学習を成功に導き、目標言語の習得に大きな影響を及ぼす要因として数多くの研究成果が報告されている(水野2014; 久保1997)。今回の受講者は社会人であり、明確な学習目的と学習意欲を持っていると思われるが、マン・ツー・マンの学習形態であるうえに、講座時間の大半は退屈になりがちな発音学習に当てられているため、如何に苦痛を感じさせず楽しく勉強できる環境を提供するかが極めて重要と考える。外発的な動機づけにより学習モチベーションを持続させることが本講座における最大の課題の一つといえよう。

## 4. 講座の実施過程

以下、学習の動機づけ、発音学習、音読訓練、場面つき学習およびコミュニケーション活動などをめぐって本講座の実施過程を述べる。

### 4.1 学習の動機づけ

#### 4.1.1 授業の導入

初日の学習内容には中国語概況の紹介がある。用意した生教材は中国地図と受講生の留学先に関する中国語のパンフレットであった。中国地図は、漢民族と少数民族、各民族の独自の言葉、中国の標準語である「普通話」とその使用地域、方言と方言の使用地域などの紹介に用いられ、受講生の留学先に関する中国語のパンフレットは中国語の簡体字、声調、音節構造などの紹介に用いられた。

教師はまず普通のスピードでパンフレットの内容を朗読し、受講者に中国語の音声やイントネーションの変化を聞かせ、日本語の発音と比べてどう聞こえたかと問いかけた。「日本語の発音より鮮明に聞こえた」「音の起伏や変化が激しい」「音が高い」「口をよく動かしている」という答えが返ってきたので、「音の起伏」が感じられたのは漢字に「トーン」を表す「声調」があるためであることを説明し、その「声調」には4つの基本声調——「四声」があることを解説した。パンフレットの中にある「汉语 Hànyǔ (中国語) と韓国語 Hányǔ (韓国語)」の例を取り上げ、発音が同じでも声調が違えば意味も異なってくるという特徴を説明し、中国語の声調の重要性を認識させるように説明した。その次に、読み聞かせた資料を受講者に見せて、漢字の字面からどんなことが書いてあるか、文章の意味を推測させてみた。最初に朗読を聞いても全然分からなかった内容でも、字面から意味を推測できたものが数箇所あった。その推測を行う過程で、受講者は日本漢字と中国漢字には同形同義語と同形異義語があることに気付くことができた。続いて、見せた資料の中から日本語には見られない中国語の簡体字を抽出させ、その簡体字がどんな意味か、またそれは日本語のどの漢字に対応するのかを考えさせた。まったく見当がつかなかった簡体字に対して、教師は日本の漢字をいくつか書き並べて、

その中から対応しそうなものを選択させた。これにより、受講者は日本と中国の漢字には異形同義語があることが分かったほか、中国語の「差」や「斤」「団」と日本語の「差」や「斤」「団」のように微妙に違っているものがあることも気付くことができた。その後、抽出した簡体字について教師のあとについて模倣発音を練習させ、発音器官の動きを感知させるように誘導した。最後に、受講生にヒントを与えながら、パンフレットに書かれた文章の意味を日本語に翻訳させ、留学先の概況を理解させた。

このように、教師からの一方的な解説ではなく受講者に考えさせ、帰納的・発見的アプローチを取り入れることにより中国語への関心を高めるとともに、学習モチベーションを持続させることを目指した。

#### 4.1.2 生教材の使用と中国文化の取り入れ

生教材やレリアは学習したことを実際の場面と結びつけるのに効果的で、楽しい学習をするためにも役立つとされている。本講座では、学習の内容に応じて各種のレリア、生教材を数多く取り入れた。例えば、家族に関する学習では、教師の家族写真や有名人の写真などを用いて練習したり、一人っ子政策、家族の役割など中国社会事情にも触れたりした。場所の尋ね方、曜日や時間に関する学習では中国地図、中国の大学の時間割、電車の時刻表などを、また数値の読み方を学習するときには数字表示のある中国人身分証明カードや運転免許証などを用いたりした。さらに、数値を指で示すジェスチャーや初対面の人に接する際の行動(握手やお辞儀など)といった非言語コミュニケーションにも触れた。自己紹介・名前に関する学習では、中国人に多い姓、名前の付け方、各時代に見られる名前の変化、夫婦別姓制度などを紹介した。買い物やお金に関する学習では、本物の中国紙幣・貨幣を用意した。その際、紙幣・貨幣の額面だけではなく、紙幣上の肖像や背景のデザインなど文化的な要素にも触れ、印刷されているピンイン(ZHONGGUO RENMIN YINHANG 中国人民银行)を読ませたり、日本円と中国人民元のレート換算の練習もしたりした。週一回の中国語の歌の時間においては受講者の好きな歌手や好きな曲を選び、歌詞の背景や意味、発音などを学習したうえで、歌の練習を行った。

#### 4.2 発音学習

ピンインの学習は、原則として、①受講生にモデル発音を聞かせ、発音の特徴を感知させる、②教師のモデル発音の後について数回発音練習をさせる、③発音の要領を説明する、という順番で行った。発音を耳から入れるのは、つねに受講生に頭を働かせ、聞き分け能力を強化する狙いからである。ピンイン、音節、単語、連語およびセンテンスにおいて明確な音声で正しい発音ができるように、講座期間中、毎日一定の時間をかけて、聞き分け、音節発音、声調パターンの練習を実施した。受講者の学習状況から判断して、二週目から発音動画ビデオを用い、口腔内部構造、音声学上の知識を紹介することとした。その際、中国語発音練習資料を用い、特に日本人学習者にとって難関である「第3声の変調」「有気音と無気音」「そり舌音」「-n と-ng」などについて系統的に訓練を行った。

日本語と中国語の発音上の相違点と共通点を利用した発音指導には、単母音の「a」「o」「e」「i」「u」「ü」と、仮名の「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」などがある。例えば、「i」の場合は、「イ」と「i」を交互に繰り返し読み聞かせ、どう聞いたかを尋ねた。同じように聞かえたという答えが返ってきたため、次に、「イ」より口を左右に強く引いて中国語の「i」に移っていくというように発音を繰り返した後、「i」のほうがりりとした明るい音であることを説明した。同様に、日本語の「ウ」と中国語の「u」の発音を交互に数回繰り返し、その違いを耳から聞き取らせた。次に日本語の「ウ」の口の形から徐々に口を丸くすぼめ、前に突き出したまま中国語の「u」に移っていくように数回繰り返した。このように、日本語と中国語の発音上の共通点と相違点を利用し、口の形、舌の位置と動きを常に自覚認識させることにより正しい発音の定着を図ることに努めた。

本講座における一番の難所は鼻母音の中の「-n」「-ng」であった。「-n」の発音はなかなかできず、「-ng」に近い発音に聞こえることが多かった。日本人学習者にとって極めて難しいとされる「-n」と「-ng」の指導法については、数多くの論文や教科書が取り上げている。

秦(2011)は、日本語の「アンナイ(案内)」と「アンガイ(案内)」の発音の違いを利用する指導方法を実践している。その方法とは、日本語の「アンナイ」の「ン」の時は、舌先が歯茎についているが、「アンガイ」の「ン」の時はそうではないことから、「-n」の時の「ン」と「-ng」の時の「ン」の音の響きの違いが耳で聞いて解るようにつく

り発音するという指導法である。また、永井 (2005) は、“-n”は「～ンヌ」の「ヌ」の寸前で舌を止め、“-ng”は「～ング」の「グ」の寸前で舌を止める (グは発音しない) という方法を提案している。『まいにち中国語』によれば、「an」の発音要領については、「ア」を発音した後、舌先を上歯茎にペタッとくっつけたままで「ン」といい、「アヌ (anu)」の発音を始めて、最後の「ヌ (nu)」の母音“u”を言うのをやめたイメージで発音するという。上記提案による「-n」の発音のポイントからは、舌先を上歯茎にくっつけさせるという共通点が見出される。

本講座では、舌の位置を習慣化し舌先を上歯茎に定着させるために、後続音節の子音が舌尖中音の二音節語を用いて練習を試みた。その代表的な語彙には以下のようなものがある。

mantou (馒头) handong 寒冬 shanliang (善良) wenuan (温暖)

その後、後続音節は唇音のもの、唇歯音のものなどを使って練習を行った。「-n」「-ng」の発音練習をするとき、むやみに集中的に練習するのではなく、講座期間中、毎日少しずつ練習を積み重ねる方法をとった。このような定着練習を通じて、受講者は「-n」と「-ng」の聞き分けが出来るようになり、また、意識的に発音すれば、「-n」「-ng」の発音ができるようになった。しかし、長いセンテンスになると「-n」の発音がくずれ、「-ng」の音が混じってしまうこともある。

#### 4.3 音読訓練

本講座のカリキュラムでは終日授業が組みこまれていたため、受講者の授業後の復習時間がかなり限られていると予想されていた。そのため、記憶を駆使して学習したものをしっかり定着させるためには、授業の中で暗記できるような授業デザインが必要と考えられる。

声に出して読む「音読」は、日本語教育においては、記憶力のみならずリスニング能力、スピーキング能力の向上に有効とされている (斉藤 2001)。音読は、テキストを見ながら読む方法とテキストを見ないで再生・暗誦する方法に大別されるが、文字に頼らず音声を媒介とする「音読」は、認知過程を強化し中国語学習に対して高い有効性があると認められている (胡 2009)。本講座では音声を媒介とする音読指導法を取り入れることにした。

具体的には、文法ポイントを復習したあと、教師の後ろについてテキストを見ながら本文を朗読させた。その次に、センテンスの順に沿わず、中心語から次節に修飾語へと文を拡張していくような方法で朗読した。その後、テキストを使わずに同じ方法で教師の後ろについて本文を朗読させ、模倣暗記をさせた。教師は受講者の状況に合わせてスピードを調節したり、フレーズごとにポーズを入れたりするなどの注意を払った。このような練習を通じて、受講者が正しい発音とイントネーションの要領を覚えるようになり、教材を見ずに文全体を暗誦できるようになった。

#### 4.4 場面つき学習

文型・文法・各種表現を学習する際、言語機能の理解を重視する場面つきの指導法を取り入れた。

例えば、人に会ったときの挨拶である。テキストに挙げられた「你好!」「您好!」「你们好!」以外に、「大家好!」「同学们好!」「李老师,您好!」「王总好!」「你早!」「早上好!」などの挨拶のバリエーションを追加し、下記のような場面を設定し、相手によって挨拶を使い分けられるように練習させた。

- ・あなたは、中国のレストランでウェイターのアルバイトをしている。お客さんが来たとき・・・
- ・あなたが企業を訪問し、訪問先の社長にはじめて会ったとき・・・
- ・あなたが自分の会社を代表して、歓迎会で大勢の前で挨拶をするとき・・・
- ・留学先の教室であなたが編入生として自己紹介するとき・・・

そのほか、中国庶民の間でよく使われる日常挨拶 (例えば、「上班去?」「出去啊?」「买菜去?」「今天真热啊!」「你来了!」「你早来了!」) やその文化背景などにも触れた。

#### 4.5 コミュニケーション活動

学習した文型や表現をもとに、復習・まとめとして、コミュニケーション・アプローチを取り入れたタスク活動、ロールプレイ活動を行った。以下、行われたインタビュー・タスクについてまとめる。

「タスク」活動は、学習者のある課題に取り組み、その課題解決の過程の中で目標言語を理解し、使用する機会を与えることによって言語習得の促進を目指す（胡 2009）。インタビュー・タスクは、インタビューを行って指示された情報を得る活動である。

**目的：**インタビュー・シートに挙げられた項目について、中国人にインタビューをし、相手の情報を得たりすることによって、自己紹介の仕方、相手の名前、国籍、職業の聞き方、相手に話しかける時や依頼や感謝を述べる時の言い方などを練習する。また、相手の答え方を聞き取り、得られた情報をまとめ、第三者に伝える練習を行う。インタビューの場面を通じて、非言語コミュニケーション、文化の側面についても理解を深める。

**準備資料：**インタビュー・タスクシート（表 3）

**インタビュー対象者：**①APU 孔子学院中国人教師 3 人 ②APU 中国人留学生 TA 2 人

**留意点：**事前に会話のバリエーションを学習する。また、単にインタビューするだけでなく、インタビューの時のマナーについても実践的に学ぶ機会となるよう、依頼、事情説明、感謝、別れるときの表現も学習する（表 4）。この活動の目的の一つは、習った文型や表現を使えることであり、失礼にならないようにインタビュー協力者の事前の了解を取った。

表 3 インタビュー・タスクシート

	姓名	国籍・家乡	职业・单位	家庭成员	出生年月	兴趣爱好	大学生生活	结婚状况
教師 A								
教師 B								
教師 C								
留学生 A								
留学生 B								

表 4 インタビューの流れと必要な表現

1 挨拶（前置き）	对不起，请问……/ 不好意思，打扰一下……/ 你们好……
2 インタビューの理由を説明する	这是我的名片。/我叫……。/ 我是日本人。/我正在学习汉语，想做一个采访。/ 我想了解一下……
3 インタビューを依頼する	可以吗？/可以耽误您一会儿时间吗？/您方便吗？
4 質問して、答えてもらう	我没听懂，请再说一遍，好吗？
5 お礼、別れの挨拶	非常感谢。/ 给您添麻烦了。/谢谢您。/再见。
6. 名前、国籍、出身地、職業に関する聞き方	您贵姓？ 你叫什么名字？/你是哪国人？你是中国人吗？/你家乡是哪儿？你住在哪儿？/你做什么工作？你在哪儿工作？你在哪儿上大学？/你是学生吗？你是老师吗？你是公司职员吗？
7. 生年月日、年齢	你多大？/你的生日是几月几号？你是哪年出生的？/我是 80 后。/他们是 90 后。
8 日常生活・趣味	你每天晚上做什么？你星期日做什么？/他喜欢旅游吗？你喜欢什么体育运动？你喜欢看电影吗？/你认识他吗？/他们是我的好朋友。/你有男朋友吗？/他没有女朋友。/你每天几点起床？你晚上几点睡觉？/你常去酒吧吗？你去网吧吗？/你早饭吃什么？/我喜欢吃中国菜。
9. 家族について	你家有几口人？/你爸爸身体好吗？/你哥哥做什么工作？/你有兄弟姐妹吗？你有几个姐姐？/我是独生子。/我有一个姐姐，一个哥哥。/你姐姐结婚了吗？/他工作忙吗？/他多大？/结婚了。我还没有结婚。/他们有孩子吗？

インタビュー・タスク活動終了後、得られた情報をまとめ、第三者に伝える練習を行った。この活動について、受講者からは以下のような感想が聞かれた。

「この活動は学習の成果を試す機会としてとらえ、資料を見ずに質問できるように事前に時間をかけてインタビュー質問を練習した。「你家有几口人? (ご家族は何人ですか)」と尋ねたとき、教師が指のジェスチャーも交えながら「六口人 (6人家族)」と答えてくれた。以前の授業の中で「6」のジェスチャーの意味を紹介してくれたのでその意味はすぐ理解できた。インタビュー協力者からも質問をいっぱい受け、自分の情報を伝えることができて嬉しかった。インタビュー協力者が真剣に相手をしてくれた貴重な経験であった」。

## 5. 評価

評価は、①各課ごとの小練習と週一回の小テストによる形成的評価、②講座修了試験と修了式におけるロールプレイの口頭発表による総括的評価、③受講者へのアンケート調査と目標到達自己評価、の3つの方面から行われた。紙面の関係で①の形成的評価については省略するが、②の総括的評価と③の受講者自己評価とアンケート調査について、以下のようまとめる。

### 5.1 修了試験による学習到達状況

修了試験における出題形式と学習到達状況を表5に示す。試験は合計98問で、出題形式は大きく基礎発音と総合技能に分けられている。具体的には、ピンインの聞き分け、声調、語彙理解、文法、読解、翻訳、場面つき自己紹介作文などの9つの部分により構成されている。受講者の得点は93点の好結果となった。

表5 修了試験における出題形式と到達度

問題No.	問題数	到達度	出題形式
1	20	19.00	発音されたピンインを聞き取って、四つの音節の中から、選択する
2	12	16.67	発音された声調を聞き取って、声調符号をつける
3	20	19.00	発音されたピンインを聞き取って、ピンインを書く
4	20	18.00	与えられた漢字にピンインと声調を書く
5	10	19.00	与えられた陳述文を疑問文に直す
6	8	18.75	与えられた文が正しいか否かを判断し、間違ったところを正しく直す。
7	6	18.33	短いセンテンスを聞き、与えられた選択肢から正しいものを選択する。
8	1	19.00	与えられた日本語短文を中国語に訳す
9	1	19.00	作文400字前後 場面つきの自己紹介

各問題の到達度の最高点を20と設定した場合、ピンインの発音に関する第1問と第3問はともに19.00であり高得点となった。語彙の読み方に関する第4問は18.00であった。疑問文、副詞、語順などの文法に関する第5問と第6問はそれぞれ19.00と18.75であり、センテンス聴力に関する第7問は18.33、日本語から中国語に翻訳する第8問は19.00、そして場面つきの自己紹介作文の第9問は19.00であった。第2問の声調に関する到達点はやや低くなっている。これは、「第3声+第3声」における第3声の変調や、「第3声+第2声」の場合の聞きわけが十分出来ていなかったことによると考察された。

### 5.2 修了式成果発表会におけるロールプレイの口頭発表

講座の総復習として行われたもう一つのコミュニケーション活動はロールプレイであった。ロールプレイは、本来、何らかの役割や状況を設定し、それに従ってどのようなやり取りをするかを学習者自身が考えながら課題を解決する「コミュニケーション活動」であるが、使える語彙や文法がまだ十分でない受講者の現状を考慮し、教師は受講生とともに受講生がこれから出会うとする場面とシナリオを設定し、一部の会話のやり取りを話し合っていた。

**目的：**定着練習した内容を含む全ての知識を活用し、イントネーションや非言語行動にも注意を払い、総合的なコミュニケーション能力の向上を図る。

**方法：**場面は受講者の留学先のキャンパスに設定した。受講者が日本人留学生役で、大学事務所の場所を尋ねることから始まる。中国語指導教師3人が登場し、それぞれ中国人留学生役、大学の先生役、レストランのウェイトレス役を演じる。修了式成果発表会の当日に、上記ロールプレイのセリフ以外に、留学先の大学先生役として修了式参加者にも登場してもらい、初対面の挨拶を交わすというアドリブシーンも設定した。

**留意点：**会話のやりとりは習った文型や表現をもとにして受講者個人のデータをできるだけ多く取り入れる。また受講者が入りたい表現があれば、それを積極的に指導しフィードバックを与える。受講者はすべての台詞を理解、熟読したうえで、自分のセリフを暗記できるように演技する。なお、ロールプレイの中の主な表現と機能は第6表に示す。

表6 ロールプレイの中の主な表現と機能

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自己紹介、自分の名前を分かりやすく説明するための言い方</li> <li>・ 自分の出身、故郷の紹介、自分の好きな食べ物、自分の趣味の伝え方</li> <li>・ 相手の国籍、故郷、趣味、好きな食べ物などの尋ね方</li> <li>・ 行きたい場所の尋ね方、相手の空いている時間の尋ね方、待ち合わせ曜日・時間の決め方</li> <li>・ 相手の電話番号の尋ね方、自分の電話番号の伝え方</li> <li>・ 数値の Si (4) と shi (10) の言い方、「1」の電話番号における読み方(yao)</li> <li>・ 御礼の言い方、嬉しい気持ちを表現したいときの言い方</li> <li>・ 初対面の挨拶、別れる時の挨拶、先生の事務所を訪ねるときの挨拶</li> <li>・ 食事やパーティへの誘い方</li> <li>・ 自分の近況を相手に伝える表現</li> <li>・ 自分の行きたいところ、行ったことのあるところの説明</li> <li>・ レストランで食事を注文するときの声かけ、また、勘定をするときの言い方</li> <li>・ 料理が美味しいかどうかの表現</li> <li>・ 自分の会社の商品を簡単に紹介する表現</li> <li>・ 中国語の歌の披露</li> </ul>
--

修了式成果発表会では、受講生は流暢な中国語で中国語指導教師と共に演技することができた。日本人にとって難しいとされる「4」(Si)と「10」(shi)、「tian」「he」「yu」「ri」などの発音は正確に出来た。留学先の先生役として登場してもらった修了式参加者との初対面の場面でも、習った中国語で落ち着いて挨拶を交わすことが出来た。APU 孔子学院参加者および派遣企業の関係者からは、短期間とは思えないほど予想以上の成果が挙げられたというコメントが得られた。

### 5.3 受講者へのアンケート調査結果と目標到達自己評価

講座終了後に行われた受講者による目標達成自己評価は巻末資料1に示す。すべての項目に確認のチェックが入れられた。また、受講者に対するアンケート調査表は巻末資料2に示し、その結果を以下にまとめる。なお、本アンケートの回答者が一名のため、より科学的な分析には不十分な部分があると思われるが、あくまで参考に補記しておく。

#### 【① 学習期間と時間割】

受講者の都合に合わせて設定した「講義期間を18日間とし、一日3コマ、1コマ95分」というスケジュールに対して、受講者からは「一日の学習時間がちょうどいい。できれば講座期間をもう少し延長し、会話力をもう少しアップしたい」というコメントをもらった。

**【② 教材と追加資料】**

「使用した教材『漢語会話301句』」については、「実用的な教材である」との評価があり、「教材内容に応じた関連語彙、フレーズ、文法を追加した本講座の進め方」という質問に対しても、「必要であり効果的である」という評価が得られた。

**【③ 発音基礎練習】**

「中国語発音練習教材を取り入れた発音基礎特訓の必要性」という質問に対し、「厳しい練習のおかげで、発音の基礎をしっかりと身につけることができたので、その後の単語や会話の勉強が楽になった」という記述がある一方で、「動画ビデオによる音声原理の効果」という質問に対しては、「発音の動画ビデオはやや分かりにくかった」という意見が出された。

**【④ 指導体制と教授法】**

「複数ネイティブ教師と中国人留学生TAによるチーム・ティーチング指導体制」については、「いろいろな方と話す機会が増え、コミュニケーション能力の向上に役立った」との評価が得られた。また、「文法の説明の分かりやすさ」、「各回学習の目的の明確さ」、「学習内容の量の適切さと進捗」および「プリントのまとめの効果」について、いずれも「5」という評価が得られた。

**【⑤ 中国語の歌とコミュニケーション活動】**

「中国語の歌は最初は自信がなかったが、数回練習するうちに上手になり、発表会で一人で歌えて嬉しかった」という感想をもらい、「ロールプレイ活動は、中国へ行った際の場面を取り入れていただいたので、教師とともに演技できて自信が付き非常に良かった」とのコメントが得られた。

**【⑥ テスト】**

「週一回の小テストの必要性和テストの出題項目の適切性」の質問に対して、「小テストの必要がある」と答えた一方、「試験内容にもう少し会話を取り入れても面白い」との提案があった。

**【⑦ 標到達評価】**

この講座を通じて「中国語の概況についてある程度理解ができた」「中国語に対しある程度興味をかきたてられた」「当初の目標がほぼ達成できた」という項目に対して、いずれも5点が与えられた。「中国語で話してみるという自信がある程度つくようになった」に対してはやや低く「4」点が付けられた。これは「講座期間を延長しよう少し会話力を付けたい」という【①学習期間】のコメントからも窺えるように、自信をもてるほどの会話力を身につけるには18日間の期間では不十分といえるであろう。

**【⑧ 講座前と講座後の気持ちの変化】**

「講座前と講座終了後の感想」という質問に対し、「初めは発音も字も分からず不安な気持ちもあったが、授業が始まると先生方のご教授のおかげで中国語を理解していくことで不安が楽しみに変わった」という気持ちの変化が示された。

**【⑨ 改善すべきところ】**

「改善すべきところ」という質問に対し、「日本人にとって簡体字は慣れていないが、初めにパターンを覚えてしまうと理解スピードが速くなるので、簡体化の一覧表があったほうが良い」という提案があった。

**6. 考察**

以下、APU孔子学院の中国語入門短期集中講座のコースデザインについて考察したい。

言語学習の効果を大きく左右する要因は、言語学習ストラテジーのほか、社会的・情意的なものがある。その社会的・情意的な要因の中で最も重視されているのは動機付けだといわれている。動機付けの要因には、課題、評価、注意、自信、満足感、授業目標の提示、フィードバックを与えるなどが挙げられている (Epstein1988; Keller 1992)。

本講座ではいろいろな段階でさまざまな方法を用いて学習者の動機付けの向上を試みた。その効果的な場面の一つは最初の授業があると考えている。授業の展開次第で、学習者の中国語に対する関心、ひいてはその後の学習の取り組み

にも大きな影響を及ぼすこともあり得るであろう。本講座では、授業の初日に到達目標とその目標を達成するのに必要な学習項目の提示、また、単元ごとに段階的な目標を提示することにより、受講者に明確な目標を持たせるようにデザインした。そして、課ごとの練習や小テストなどを通じて、定期的に到達目標に照らし合わせ、自己チェックを行わせた。これは、スモールステップで小さな達成感を数多く感じさせることにより、目標に向かって確実に一步一步進んでいることを自覚認識させ、中国語学習の意欲と自信の向上につなげていきたいという狙いがあるからである。「最初の不安から楽しみに変わった」という受講者の気持ちの変化からは、本講座に取り入れた帰納的・発見的な授業の導入、生教材の使用、言語の側面・中国文化の紹介、学習者が関心を持つ話題の選定などの工夫は、中国語学習のモチベーションの向上に有効に作用していたのではないかと考察された。

本講座では構造シラバスと場面シラバスの複合シラバスを用い、また、授業の復習としてタスクシラバスも取り入れた。教授法も、従来のようにある特定の言語理論や学習理論によって開発された一つの教授法に全面的に依存することなく、場面つき学習、音読法、コミュニケーション・アプローチなど複数の指導法を有機的に組み合わせて行ってきた。

中国国内における中国語による直接教授法の増加の背景には、2002年に中国政府が発表した『高等学校外国留学生汉语教学大纲』に基づく学習シラバスにおいて、コミュニケーション機能が到達目標として明確に位置づけられたことがあると考えられるが、そのほかに、早い段階から目標言語に慣れさせ言語センスを鍛えることや、中国語に包み込まれた環境におかれているなどの要因も挙げられるであろう。しかし、目標言語による教授では、中国のようにたえず目標言語にさらされる環境に身を置いていない場合、特に日本国内の日本人初級学習者の場合、かえってコミュニケーションに不安を覚えさせることもある(呉 2011)。日本国内の初級中国語教育には、「折衷的な直接教授法」が薦められている(高見 2004)。日本の大学教育現場でよく見られる、日本人教師による文法解説・対訳、中国人ネイティブによる定着練習といった連携式指導方法も、一種の「折衷的な直接教授法」といえよう。

本講座では、中国語の概況紹介や文法説明に関しては、日本語で作成した資料を配付し、授業中はできるだけ日本語に頼らない方法で進めてきたが、表現のニュアンスの微妙な違い、コミュニケーション活動の場面設定の打ち合わせ、テストの間違い分析および中国文化的な要素については、日本語で説明するなど柔軟に対応してきた。今後は、学習者の背景や学習適性、学習内容、学習環境などによって、媒介言語を使い分ける対応が必要ではないかと考える。

発音指導においては、受講者の語学適正から判断し、二週目から中国語発音練習資料を取り入れ、知識面と技能面が一体となった系統的な訓練を行った。その結果、受講者は舌の動きや位置などに常に留意し、発音がどう間違っているのかを意識することができるようになった。その訓練により、受講者のピンインの聞き分け能力が一段と向上し、中国語の発音基礎作りに大いに役立っているのではないかとと思われる。

しかし、声調の変調の聞き分け、「-n」の発音については、講座終了時点でもまだ完全に定着するには至らなかった。「-n」の指導方法について、朱(2010)は、生理的、知覚的実験から、「[an]の「a」は前舌面が高く舌全体が口腔全部に移動するのに対し、「ang」の「a」は後舌面が高く舌全体が後寄りになること、中国語話者は母音時から後続鼻音の調音点へ接近している」ことを指摘し、「母音の差の認識と再生の訓練が習得の早道となる」という指導ポイントを提案している。今後、これらの方法に基づいた練習に加え、動画ビデオとともに、要点だけを指摘するトレース画像の併用など、より有効性の高い発音指導法を探索していく必要があると思われる。

コミュニケーション・アプローチに基づいたロールプレイ活動は、受講者がこれから遭遇する場面を設定し、教師と受講生の共同でシナリオとセリフを吟味し作り上げたものである。受講者が取り入れたい表現については、教師はそれに対応してフィードバックを与えた。また、まだ習っていない表現についても具体的な例を挙げ、その構造・意味・機能について指導したりした。「意味中心の言語理解・産出活動においては、特定の言語形式(語彙・文法)の習得を促す」(村野 2006)と述べられているように、今回の産出活動においては受講者が多くの実用的な文法、表現を習得することができた。その結果、ロールプレイのセリフには、中国語入門初心者には、かなりの言語機能と実用的な表現が含まれていたといえよう。

複数の教師で一つの研修を担当する場合、教師間で一貫した指導方針を共有・保持することが学習効果を高める上で不可欠である。受講生の学習状況をリアルタイムに把握するため、指導教師全員が事前打ち合わせ、定期的な全体会議、毎日の授業の詳細記録、テスト分析などを行い、情報の共有を図ってきた。また、指導教師連携のもとに行われたタスク活動、ロールプレイ活動も学習者のコミュニケーション能力の向上に大きな役割を果たしたと考えられる。「多くの人と応用練習ができて、貴重な体験となった。渡航先を背景としたロールプレイ活動は有意義であった。これから二年間しっかりと中国語と中国文化を学んでいきたい」といった受講者のコメントから考察できるように、複数ネイティブ教師によるチーム・ティーチング指導体制の意義は高く、教師と受講者の共同演出により、中国語学習の動機づけを一段と向上させたのではないかと実感された。

しかし、改善すべき点がいくつか見出された。本講座では授業中に出てくる簡体字のみに関して、日本漢字の書き方と比較しながら説明したが、今後は、簡体字の特徴をより理解しやすくするため、中国簡体字と日本漢字の対照一覧表をあらかじめ提示する必要があると認識できた。また、短期集中型講座でも、会話力を測る会話試験の設定も検討すべきであろう。

## 7. おわりに

本稿では、APU 孔子学院において行われた社会人向け中国語短期集中講座を事例として、多方面からの中国語学習の動機づけ、複合シラバスの導入、知識面と技能面が一体となった発音基礎訓練、ネイティブ教師によるチーム・ティーチング指導体制、コミュニケーション能力の育成を重視したコースデザインについて述べた。また、学習評価をもとに、本講座のコースデザインの意義と課題を考察した。

コース目標の提示、目標到達自己評価、課題の提示、生教材の使用、達成感の実感といった動機付けをするための授業の工夫は、中国語学習のモチベーションの向上に有効に作用していると捉えられた。音声学上の知識面と発音技能面が一体となった発音基礎訓練は、中国語の発音基礎作りに大いに役立っているといえる。発音に関する音声学の知識の必要性について、秦(2011)が述べているように、音声知識を基礎に据えた自覚度の高い練習による習得は、たとえネイティブスピーカーの発音には到達していなくても、そこには自分で練習努力をして身につけた発声と発音の鍛えられた美しさと感動があり、学習者の「人柄」の表れとして何者にも代えがたい価値があることも事実である。

また、複合シラバスの採用やコミュニケーション能力の育成を重視した活動により、中国語入門段階でも、「わかる」教育と「できる」教育を同時に行うことができるという示唆を得た。

本講座コースデザインにより所期の目的を達成し一定の成果を挙げることができたが、学習対象者はただ一人であるため、極めて限られた研究である。学習者の背景やレディネスにより学習効果が変わることも否定できない。学習者の多様化もさらに進んでいくなかで、教師がいかに伝統的な教授法を熟知しながら個々のニーズに応えるための新しい教授法を編成し、それを具体的な教育状況に応じて使いこなしていくかということこそが中国語教育の課題であろう。

## 参考文献

- Epstein, J.L. (1988) Effective schools effective students: Dealing with diversity. In R. Haskins & D. McRae (Eds.), *Policies for America's schools: Teachers equity, and indicators* 89-126. Norwood, NJ: Ablex.
- 胡玉華 (2009) 『中国語教育とコミュニケーション能力の育成—「わかる」中国語から「できる」中国語へ』東方書店
- 康玉華・来恩平 (2007) 『中国語会話 301 文 (2007)』北京言語大学出版社
- 久保信子 (1997). 「大学生の英語学習動機尺度の作成とその検討」『教育心理学研究』45 449-455
- Keller, J.M. (1992). Enhancing the motivation to learn: Origins and applications of the ARCS model. 東北学院大学教育研究所紀要 第11号 45-67
- 水野 知津子 (2014) 「英語教師に求められるもの—外国語学習方略の動機付け観点からの考察」香川高等専門学校研究紀要 第5号 89-98
- 永井鉄郎 (2005) 中国語初級学習者に対する発音教育の試み 中国語教育 第3号 76-93
- 野村井仁 (2006) 『第二言語学習研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店
- NHK 放送協会 (2013) 『まいにち中国語』NHK 出版
- 秦 耕司 (2011) 中国語教育における発音教育とその意義：中国語インテンシブ教育の構築 長崎県立大学経済学部論集 45(3) 29-71
- 斉藤孝 (2001) 『声に出して読みたい日本語』草思社
- 高島英幸 (2000) 『実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導』大修館書店
- 高見沢孟 (2004) 『新・はじめての日本語教育2 日本語教育教授法入門』アルク
- 呉 青姫 (2011) APU における初級中国語学習者向けの学習指導法—復旦大学の外国人向け中国語教育実態から学んだ経験と教訓— ポリグロシヤ 20 巻 81-90
- 早田武四郎・加澤恒雄 (1994) 英語教育における訳読教授法の功罪およびその効果的活用に関する一考察 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要 N04 73-83
- 朱春躍 (2010) 『中国語・日本語音声の実験的研究』くろしお出版

巻末添付

[資料1] 到達目標自己評価

<p><b>中国語で自己紹介をする</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の名前を中国語の漢字とピンインで書け、どんな漢字であるか、相手に分かるように簡単に説明できる</li> <li>・自分の家が日本のどのあたりにあるか、表現できる</li> <li>・自分が所属している集団を簡単に伝える</li> <li>・自分の住んでいる場所の名前を表現できる</li> <li>・家族構成を言える</li> <li>・自分の電話番号を言える</li> <li>・自分がどこの国の人かを伝える</li> <li>・名刺を使って自己紹介できる</li> <li>・自分のふるさとの特徴は言える</li> <li>・家族の職業、年齢、趣味を言える</li> <li>・自分の年齢を言える</li> </ul>
<p><b>中国語で相手のことを尋ねる</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の名前を尋ねる</li> <li>・相手の職業を尋ねる</li> <li>・相手の年齢を尋ねる</li> <li>・相手の電話番号を尋ねる</li> <li>・どこの国の人かを尋ねる</li> <li>・相手の家族構成を尋ねる</li> <li>・相手の家族構成を尋ねる</li> <li>・尋ねる前の前置きを言える</li> </ul>
<p><b>中国語で数や年月日をやりとりする</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年月日を言える</li> <li>・1~1000 までの数を数える</li> <li>・時間を言える</li> <li>・以下の量詞を使う(個, 本, 天, 口)</li> <li>・起床、食事、帰宅など簡単なスケジュールを言える</li> </ul>
<p><b>中国語で場所案内</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・行きたい場所を尋ねる</li> <li>・どういう交通手段で行くかを尋ねる</li> <li>・行きたい場所まで所要時間を尋ねる</li> <li>・時間量を言える</li> <li>・目的地まで遠いか近いかを尋ねる</li> <li>・簡単な方位詞を使う</li> </ul>
<p><b>レストランで食事をする</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・値段を尋ねる</li> <li>・相手の好みを尋ねる</li> <li>・おいしいかを質問し、返事できる</li> <li>・簡単な誘いができる</li> <li>・オーダーや会計のときの言い方が言える</li> </ul>
<p><b>その他</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人に会ったとき、分かれるときの簡単な挨拶を言える</li> <li>・相手によって挨拶を使い分けられる</li> <li>・相手の都合を尋ねる</li> <li>・謝る時の簡単な挨拶ができる</li> <li>・好きな中国の歌は中国語で2曲歌える</li> <li>・好みを簡単に紹介できる</li> </ul>

巻末添付 [資料2]

中国語短期集中講座の実施に関するアンケート調査

このアンケートは、APU 孔子学院の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。また、このアンケートの結果は今後論文作成の基本データとして無記名で利用されることがあります。率直にご記入いただくようお願いいたします。

講座の内容：渡航前の中国語短期集中研修。中国語の発音の基礎をマスターし、自己紹介ができる程度を目指す。

講座の実施時期 2014年4月7日～4月30日まで 95分 X 53クラス

(1) 講義期間は正味18日間となりましたが、その期間についてどう思われますか。

- このぐらいでちょうどいい
- できればもう少し期間を延長したほうがいい
- もう少し短くしたほうがいい
- その他

(2) 講義時間は一日3コマ(午前1コマ、午後2コマ)、1コマはAPUの時間に合わせて95分でしたが、この時間割りは適切だと思われますか。時間割について改善すべきところがあれば書いてください。

- ちょうどいい
- もう少し増やしてもいい
- もう少し減らしたほうがいい
- その他

(3) 使用教材は《汉语会话301》(北京语言大学)になっていますが、どう思われますか。

- 分かりやすい教材である
- 実用的な教材である
- 発音ポイントや文法説明はもう少し詳しくしたほうがいい
- 発音練習問題をもう少し充実したほうがいい
- 会話練習問題をもう少し充実したほうがいい
- その他

(4) メイン教師とサブ教師による協力授業体制について、どう思われますか。なにか改善すべきところがあれば、書いてください。

(5) TAによる会話練習についてどう思われますか。

- よかった
- とりわけなくてもよい
- どちらともいえない
- その他

(6) 教材第1課から第10課までの内容をベースに、これと関連する単語、フレーズ、文法を追加して授業を進めてきましたが、どう思われますか。

- 教材の内容だけで十分である
- 実用的なものを追加したほうがいい
- どちらともいえない
- その他

(7) 授業における中国語の歌の練習についてどう思われますか。

- なくてもよい
- あったほうがいい
- どちらともいえない
- その他

(8) シラバスの進度について、どう思われますか。

- もう少しゆっくり進めたほうがいい
- もう少し速くてもかまわない
- ちょうどいい
- その他

(9) 教材以外に基礎発音練習を取り入れましたが、その必要性についてどう思われますか。

- 教材の発音練習だけで十分である
- 基礎発音練習はとりわけ入れなくてもいい
- 取り入れたほうがいい
- その他

(10) 週一回、小テストを行いました、その必要性についてどう思われますか。

- とりわけ必要はない
- あったほうがいい
- どちらともいえない
- その他

(11) 小テストをすとしたら、何曜日に行えばいいと思われますか、その理由も書いてください。

- 月曜日
- 金曜日
- その他                      理由：

(12) 会話練習についてどう思われますか。

- もう少し増やしたほうがいい
- インタビュー形式の会話練習がよかった
- このぐらいでいい
- 会話練習を減らし、もっと新しい内容を勉強したほうがいい
- その他

(13) (12)の質問について、もう少し増やしたほうがいいと答えられた場合、習った文型を用いてどんな会話練習をもっと取り入れたほうがいいと思われますか。具体的な例をいくつか挙げてください。

(14) この講座の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

5 そう思う    4 ややそう思う    3 どちらともいえない    2 あまりそう思わない    1 そう思わない

- |  |   |   |   |   |   |
|--|---|---|---|---|---|
| <input type="checkbox"/> 文法の説明は分かりやすかった    | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| <input type="checkbox"/> 各回の授業内容の量が適切だった   | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| <input type="checkbox"/> 各回の授業内容は明確だった     | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| <input type="checkbox"/> パワーポイントの使用が効果的だった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| <input type="checkbox"/> 発音ビデオの使用が効果的だった   | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| <input type="checkbox"/> プリントのまとめが効果的だった   | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

(15) この授業からあなたは次のものを得ることができたと思えますか。

5 そう思う    4 ややそう思う    3 どちらともいえない    2 あまりそう思わない    1 そう思わない

- |  |   |   |   |   |   |
|--|---|---|---|---|---|
| <input type="checkbox"/> 中国語の概況について、ある程度理解ができた       | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| <input type="checkbox"/> 簡単な自己紹介ができるようになった           | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| <input type="checkbox"/> 中国語で話してみるという自信がある程度つくようになった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| <input type="checkbox"/> 中国語に対しある程度興味をかきたてられた        | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

(16) 当初の目標の達成について、どう思われますか。

- 当初の目標がほぼ達成できた
- 当初の目標がある程度達成できた
- 当初の目標が期待通りに達成できなかった
- どちらともいえない
- その他

(17) 中国語の概況、文法、発音ポイントについて、日本語で説明する必要があると思われますか。

- 日本で説明したほうが分かりやすい
- とりわけ日本語で説明しなくてもいい
- どちらともいえない

□ その他

- (18) ロールプレーを教師と一緒に行いましたが、その内容、実施方法についてどう思われますか。お気づきの点、改善すべき点があればご記入ください。
- (19) 今度の授業で取り入れてほしい、または、もっと詳しく勉強したいと思われる内容がありましたら、書いてください。
- (20) 毎回のテストの内容について、なにか改善すべきところがあれば書いてください。
- (21) 教室環境について、どう思われますか。なにか改善すべきところがあれば書いてください。
- (22) この講座でよいと思った点があれば書いてください。
- (23) この講座で改善すべきだと思った点があれば書いてください。
- (24) 講座が始まる前になにかご不安やご心配がありましたか。そして、講座終了後のご感想をお願いします。

**謝辞：**

本講座は立命館アジア太平洋大学、APU 孔子学院関係各位からの多大な協力を得て実施することができた。APU 孔子学院院長をはじめ、事務関係者の方々、中国語ボランティア講師、TA の皆様に心より感謝申し上げる。また、本稿の校正にあたり、有益なコメントをいただいた APU 孔子学院副院長杉田欣二先生、ポリグロシア編集委員の方々、並びに山岡浩二先生に感謝の意を表したい。